

ンと周囲の個体関係から分析する。また採餌時の周囲の反応については、観察個体と他個体との攻撃行動と排除行動から分析する。

以上の観点および方法で研究は行われている。高崎山では、一日の餌をコムギなどの人工餌と森の自然餌から得ている。これまで高崎山の出産個体は、非出産個体に比べて人工の餌から約90~100kcal /日多く摂取していることが確かめられている。繁殖状態のエネルギー要求量の増加分を考えると、この値は、すでに知られているアカゲザルのものと比べると少なすぎると思われる。そのため出産個体と非出産個体の間で、一日の自然餌からの摂取エネルギーの違いを調査中である。自然餌からの摂取量について、詳しい栄養分析を行っていないが、両者の間に多少の差が認められた。また、同一個体を2年追跡しているなかで、出産した年と出産しなかった年の個体の摂取量には明らかに差がみられている。両年の人工餌場での採餌時の行動を比べると、観察個体は出産した年にエサの多くまかれた場所で採食していることから、出産期に積極的行動を示している傾向がうかがえた。さらに出産した年の観察個体に対する周囲の反応は、出産しなかった年に比べて、積極的な行動を示し始めた時期に他個体からの排除行動および攻撃行動の頻度がやや高かった。

自由：9

五木村と相良村におけるサルの伝承や禁忌の比較研究（その2）

藤井尚教（尚絅大・心理）

1992年から熊本県球磨郡相良村で、1993年からは隣の五木村で、サルと人との関わりを、サルに関する伝承や禁忌について面接調査を行ってきた。今回その2の報告をする。

「サル」は山言葉として両村で禁忌である。

サル殺しの禁忌は相良村で非常に強くしかも隠された形で存在していたが、五木村では西日本に存在する一般的なものであった。

サル肉を食べる話は両村で得られたが、サル殺しの禁忌が存在する地域でサル肉食が行われているという矛盾は案外普遍的事実のようである。

サルの黒焼きについての詳細な話や関係者が、相良村では残っているが、五木村では簡単な噂だけしか得られなかった。

最大の関心事であったサルの手について 五木村で1994年度に新しく2例のサルの手を見つけ出した。その一つは玄関の柱に左手が糸で結んでぶら下げてあり、魔除けあるいは泥棒よけであった。もう一つは、前年に左右二本のサルの手が馬小屋の柱に打ち付けてあるのを見つけた同じ集落で、馬小屋の柱に左手を釘で打ち付けてあった。これは、魔除け、特に犬神よけであった。

馬小屋の表の柱にサルの手が打ちつけて魔除けにした例は、馬や牛の繁殖を願う厩猿の一例であり、相良村ではそれはすべてサルの頭蓋骨であったが、五木村ではサルの手が使われていて、他にもいく例があったようである。サルの手を厩猿とする用法は相良村ではすでに消え、五木村で残存してきたのであろう。しかもその牛馬の出産において危害をあたえる〈魔〉として五木村では犬神が想定されていたことが理解された。

サルの手の使用目的として、魔除け（熱病治しを含む）、河童よけ、失せ物探し（泥棒よけを含む）、人の安産、厩猿、家畜の売買、招福の宝物があげられ、その設置あるいは保管場所として、玄関、馬牛小屋、箱に入れて大切に保管の3タイプがあった。厩猿は五木村のみであったが、右手よりも左手がその効能は大きいといわれる点は共通であった。

この調査で、サルに関する禁忌を受け入れる人々の心理に、同時に〈魔の受容〉という心性が存在していることに気付かされた。

自由：10

ヤクシマサルの糞と頬袋による種子散布の効果の違い

野間直彦（森林総合研究所九州支所）

湯本貴和（京都大学生態学研究センター）

霊長類の種子散布は、従来糞による散布だけが注目されてきたが、頬袋を持つ旧世界サルの場合には、そこにいったん果実をつめたのちに種子を吐き出す「頬袋散布」がかなり効果的であることが明らかになってきた。本研究では、屋久島の照葉樹林に生息するヤクシマサル *Macaca fuscata yakui* が関与する種子散布の、糞と頬袋による効果の違いを比較した。

屋久島研究林の人づけされた群れで1頭の個体を連続して追跡し、どこで果実を食べたかを記録